

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	20220004	研究期間	平成20年度～平成24年度
研究課題名	意識・内省・読心ー認知的メタプロセスの発生と機能	研究代表者 (所属・職)	藤田 和生（京都大学・大学院文学研究科・教授）

【平成23年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
○ A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>(意見等)</p> <p>認知科学における認知的メタプロセスの発生過程についての科学的解明は、ヒトを理解する上での重要課題であり、我が国が世界的に貢献すべき分野である。本研究は、多様なメタ認知過程、エピソード記憶、感情の認知と制御、共感と他者理解等について、多様な動物種と発達段階の異なる乳幼児を対象に実験的研究を行ってきた。</p> <p>その結果、当初目標以上の成果が得られつつあり、それらは世界的レベルの学術雑誌などに報告されている。研究組織の協力関係は良好であり、また、国際的な共同研究の成果も評価できる。</p>	

【平成25年度 検証結果】

検証結果	研究進捗評価結果どおりの研究成果があった。
A+	<p>目標1) メタ記憶と情報希求行動について、フサオマキザルのメタ記憶と鳩の情報希求行動があることを示した。</p> <p>目標2) 確信度の認知とリスク選択について、鳩と鶏により、鳥類にも可能であることを世界で初めて示した。</p> <p>目標3) エピソード記憶と未来計画について、犬においてwhatとwhereを統合した偶発的記憶利用が可能であることを示した。</p> <p>目標4) 感情の認知と制御についてフサオマキザルが他者の感情的反応から推理できることを実験的に明らかにした。</p> <p>目標5) 共感と他者理解について、チンパンジーと12か月乳児において、自己行為の経験が他者理解に及ぼす効果の種差を実証した。</p> <p>以上の実験的成果は、学術雑誌でも報告され、社会的な認知を得ている。</p>